

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷 (上)

竹村, 則行
九州大学文学部 : 教授 : 中国文学

<https://doi.org/10.15017/9668>

出版情報 : 中国文学論集. 24, pp.11-28, 1995-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷（上）

竹村則行

本稿は、唐・白居易「長恨歌」から清・洪昇『長生殿』に至る、楊貴妃に取材・言及した作品・記録を中心に、歴代の文人によつて描写されて来た種々の楊貴妃故事の変遷について、系統的に概括しようとしたものである。楊貴妃が八世紀前半の中国盛唐に於て玄宗の愛妃として栄華を極めた事、及び七五六年、安祿山乱の渦中に馬嵬驛に於て非業の死を遂げた事等については、今更改めて贅言を要しないであろう。また貴妃の没後五十年、白居易の「長恨歌」にロマン溢れる玄宗楊貴妃の情愛が歌い込まれる事によつて、その後の中国はもとより、わが国平安時代以後の日本文学にも甚大な影響を与えている事も、基本的には既に言い尽くされている。

しかし、ここで、我々が「絶世の美女」楊貴妃について「知っている」事を今一度謙虚に問い直してみると、実は全くあやふやである事に気付く。その出自、その容貌、寿王妃から楊太真へ玄宗妃へと移行する履歴、馬嵬での最期等々を考へても、我々が今日知り得ているのは、基本的には「長恨歌（伝）」『資治通鑑』『新・旧唐書』『太真外伝』等々に記述された記録を基にして、勝手に想像を膨らませてイメージした楊貴妃像に過ぎない。

今日の楊貴妃伝説の典型となった白居易「長恨歌」は楊貴妃没後五十年に構想された。その当時、白居易は当然楊貴妃の姿を実見する事は無く、「長恨歌」は恐らく当時当地に伝えられていたであろう楊貴妃伝説を巧妙に仕組んだものである。してみれば、楊貴妃故事は典型化された当初から、既に実態の如何に関わらず、想像による文飾

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷（上）（竹村）

の要素を分ち難く具有していた。而もそれが盛唐の愛妃の栄華と零落に纏わる故事であれば、中晩唐のみならず、後世の中国や日本の文人にとつて、絶好の話題であつたのは間違いない。

こうして、楊貴妃絶世美人説は、同時代の李白「清平調詞」に早く淵源を見るものの、実質的には白居易「長恨歌」に於て典型化されたものと私は考へる。その後の関連作品における楊貴妃の栄華から零落に至る物語の展開も、基本的には全て白居易「長恨歌」に於て設定された祖型の枠組みを出るものではなかつた。但し、全ての関連作品が「長恨歌」と同型という訳ではない。元・王伯成「天寶遺事諸宮調」には民間芸能としての楊貴妃像の「通俗性」が見られるし、南宋・無名氏「梅妃伝」に於ては梅妃を楚々とした主役に設定した結果、楊貴妃は癩症の「悪女」として描かれる。この傾向は、明・呉世美『驚鴻記』も同様である。清・洪昇『長生殿』に於ては、これらの従来の楊貴妃伝説を「情」の觀念の下に取捨してまとめ上げ、特に後半の大団円描写に特色を見せる。

本稿は、これらの楊貴妃に取材した文学作品について、今一步立ち入つて考察し、そこに描かれた楊貴妃故事、楊貴妃像の変遷について検討する事を通して、『楊貴妃文学史研究』とも名づくべき、一種の個別題目による文学史研究を目標とするものである。

二

李白「清平調詞」三首は、玄宗と楊貴妃の牡丹の花見に急遽召し出された翰林学士李白が、楊貴妃の眼前で楊貴妃と牡丹の雙艶を巧みに詠み込んだものとされる。同時期の杜甫が竟に楊貴妃の御前に侍る機会が無かつた事や、中唐の白居易「長恨歌」が楊貴妃没後五十年に詠まれた事等を考へると、李白のこの連作詩は、唯一作者が楊貴妃の面前でその艶美を詠んだ詩篇として貴重である。その詩はしかし、如何にも夢幻と仙女と月世界とを好んだ詩仙の詩らしく、渺茫として摺み所が無い。その中で、後世物議を醸したのは次の其二詩である。

一枝紅艶露凝香 一枝の紅艶 露 香を凝らす

雲雨巫山枉斷腸 雲雨 巫山 枉いよしく断腸せん

借問漢宮誰得似 借問す 漢宮 誰か似るを得ん

可憐飛燕倚新妝 可憐の飛燕 新粧に倚る

『太真外伝』に抛れば、この詩に於て李白が楊貴妃を漢の趙飛燕に喩えたのは、貴妃を甚だ賤しんだものと、高力士が楊貴妃に讒言をして、李白を貶めたという。また蕭士贇注によれば、ここに李白が言う「雲雨巫山」とは、先王と襄王とに共に契つた神女を、玄宗と寿王に共に仕えた楊貴妃に喩えているのであり、「枉断腸」とは楊貴妃を忘れられない寿王の無念さを述べたものだという。ここで確認しておきたいのは、高力士の讒言や蕭士贇の解釈はあくまで他人の解釈でしかない事である。決して李白が自らその様に詩篇の意図を表明している訳ではない。問題とすべきは、果して李白自身にその様な楊貴妃讒言やあからさまな諷刺の意図があったか否かである。そしてその答えは、李白には固より楊貴妃を讒言する意図は当初から無かつたと言わねばならない。何故ならば、翰林学士李白がここでそうしなければならぬ理由は何も無いからである。但し、讒言は固より捏造される。本人にその意図が無くて、他人がそれを讒言のネタにする不安材料は楊貴妃の側にはあつた。つまり、高力士の讒言や蕭士贇の解釈に指摘された出自の卑賤さや経歴の異常さを楊貴妃は容易には払拭し難かつたのが実情ではなかつたか。李白は楊貴妃のこれらの事実について、同時代人として、噂話も含めて全く知らなかつたとは考えられず、当然幾分か或いは十分に知悉していたであらう。むしろ、日頃知り得ている事実を牡丹の花見の応制詩に於て、何のこだわりも無くサラリと言つてのけた所に、詩仙李白の本領を見て取る思いが筆者にはするのである。

杜甫は楊貴妃と時代を同じくするが、場面を同じくしない。例えば「麗人行」詩は、天宝十二載（七五三年）三月、曲江の祓禊に集う楊貴妃一族の豪華さを詠むが、この年、なお無官の杜甫は長安に居住してはいたものの、曾ての李白の様に、宮廷人として玄宗や楊貴妃の身近に侍る事は無かつた。従つて、その「麗人行」詩に於て、

紫駝之峰出翠釜 水精之盤行素鱗 紫駝の峰を翠釜より出し 水精の盤に素鱗を行る

犀筋厭厭久未下 鸞刀縷切空紛綸 犀筋は厭厭して久しく未だ下されず 鸞刀は縷切して空しく紛綸たり

と述べる一族の豪華な食事の様子も、杜甫自らが百官の一として直接に関わるのでは無く、杜甫は大勢の一般大衆の一人として遠くから見物していたものと考えられる。杜甫のこの立場を更に典型的に表現するのは、天宝

「長恨歌」から「長生殿」に至る楊貴妃故事の変遷（上）（竹村）

十四載十一月、即ち安祿山挙兵の正しく同年同月に詠まれた「自京赴奉先縣詠懷五百字」詩である。そこに

凌晨過驪山 御榻在嵎嶼 凌晨 驪山を過れば 御榻 嵎嶼に在り

とあり、長安から奉先県に赴く途次、杜甫が玄宗楊貴妃の避寒先驪山の華清宮を通過した事を述べる。中の、

賜浴皆長纒 與宴非短褐 浴を賜ふは 皆長纒にして 宴に与かるは 短褐に非ず

彤庭所分帛 本自寒女出 彤庭の分つ所の帛は 本と寒女より出づるなり

朱門酒肉臭 路有凍死骨 朱門に酒肉臭く 路に凍死の骨有り

榮枯咫尺異 惆悵難再述 榮枯 咫尺に異なり 惆悵して 再び述べ難し

等の詩句から、杜甫が虐げられた庶民の苦悩を描く事によって、まさに安祿山乱勃発のその時点における唐王朝の矛盾を敏感に肌身に感じ取っている事が歴然とする。やがて安祿山乱後、楊貴妃没後の曲江の零落を描いた「哀江頭」詩では、楊貴妃の死について、

明眸皓齒今何在 血汚遊魂歸不得 明眸皓齒 今何くにか在る 血汚の遊魂 帰ること得はず

清渭東流劍閣深 去住彼此無消息 清渭は東流し 劍閣は深し 去住 彼此 消息無し

と詠むが、楊貴妃への一方的な甘美な同情はここには無い。そして最後に、至徳二載（七五七年）に詠まれた「北征」詩では、

憶昨狼狽初 事與古先別 憶ふ 昨 狼狽の初め 事 古先と別なれり

姦臣竟菹醢 同惡隨蕩析 姦臣は竟に菹醢にせられ 同惡 随つて蕩析さる

不聞夏殷衰 中自誅褒姒 聞かず 夏殷の衰へしとき 中に自ら褒・姒を誅せしを

とあり、楊貴妃は周・殷の褒姒や妲妃にも比すべき悪女として括られる。杜甫は、この直前に肅宗治下で待望の諫官たる左拾遺職に就いた事もあって、この詩では、傾国の「尤物」としての楊貴妃批判が甚だ辛辣である。

以上、李白と杜甫が楊貴妃について詠んだ主要作品について見て来た。李白や杜甫には、この他にも楊貴妃を西王母に喩えた詩篇などがあり、戸崎論文によれば、李白・杜甫は楊貴妃を「仙界の女王、淫奔なる妖姫であると観

ていた」とされる。

そして、以上に検討した数篇の詩篇から、同時代人の李白・杜甫に於ても、宮廷人であるか否とに關わらず、楊貴妃についての知見は、当時の噂話程度以上のものではなかったであろう事が推測される。当然かも知れないが、この、誰もが楊貴妃について知っていて、而も誰もその実相について定かには知らないという楊貴妃故事の特徴は、次の白居易「長恨歌」に於て、ロマン溢れる美人楊貴妃を自由な想像によつて無尽に造り出す大きな要素であった。

三

陳鴻「長恨歌伝」の識語に拠れば、白居易「長恨歌」（以下「歌」と略称）及び陳鴻「長恨歌伝」（以下「伝」と略称）は、元和元（八〇六）年十二月、整屋県尉となつて赴任した白居易を歓迎して、この地に住む陳鴻と王質夫とが連れ立つて名利仙遊寺に遊んだ際に構想された。最終稿は後日に完成したとしても、「歌」「伝」制作の契機がこの時に在つたとする「伝」の識語は信ずるに足るであろう。このうち「歌」については今日既に多く検討されているので、ここでは研究が比較的手薄に見える「伝」を中心にして考察する事にする。

陳鴻「長恨歌伝」は今日三種類の異本が伝えられる。即ち、

A 『白氏文集』卷十二所収「長恨歌」附載のもの、及び『文苑栄華』卷七九四所載のもの（この二本は同種）。

B 『文苑栄華』卷七九四に附載する『麗情集』及び『京本大曲』系統本。

C 『太平広記』卷四八六所載のもの。

である。このうち、C『太平広記』本については、汪辟疆『唐人小説』に『太平広記』に採る所のものは或いは刪削を経たものであろう」と推定する如く、A本の刪略本だと思われる。そこで問題とすべきはA本とB本との關係、即ち『文苑栄華』卷七九四に正本と異本として併せ掲げる二本の關係である。結論から先に言えば、筆者は陳寅恪『元白詩箋證稿』「長恨歌」に、

両本の伝文を読んでみると、通行本（引用者注…『白氏文集』本）の文の方が『麗情集』本より佳いようである。

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷（上）（竹村）

『麗情集』本が陳鴻の原文であり、通行本は白楽天の刪易を経たものである事を疑わせる。とあるのに同意する。陳寅恪氏が必ずしも明示していない論拠について、今、私なりに以下に補足してみる。

(イ) B本はA本に較べて四字句を頻用しており、文意が却って生硬である事。つまりA本はB本を基にして、文意を分かりやすい様に推敲した結果であると考えられる。(この逆の場合は考えにくい。)

証例①…B 開元中、六符炳靈、四海無波、禮樂同人、神和天子、在位歲久、倦乎吁食。

A ← B 開元中、泰階平、四海無事。玄宗在位歲久、倦於吁食宵衣。

証例②…B 時歲十月、駕幸驪山之華清宮、浴於溫泉。内外命婦、燿燿景從、浴日餘波、賜以湯浴。靈液不凍、玉

← A 樹早芳、春色澹蕩、思生其間。

A ← B 時每歲十月、駕幸華清宮、内外命婦、燿燿景從、浴日餘波、賜以湯沐、春風靈液、澹蕩其間。

証例③…B 綠雲生鬢、白雪凝膚、渥飾光華、織纓有度、舉止閑冶、如漢武帝李夫人。

A ← B 鬢髮膩理、織纓中度、舉止閑冶、如漢武帝李夫人。

証例④…B 詔浴華清池、清瀾三尺、中洗明玉、蓮開水上、鸞舞鑑中。

A ← B 別疏湯泉、詔賜藻瑩。

証例⑤…B 拜於上前、回眸血下、墜金鈿翠羽於地。上自收之。嗚呼、蕙心紈質、天王之愛、不得已、而死於尺組

← A 之下。

A ← B 倉皇展轉、竟就死於尺組之下。

証例⑥…B 駐六龍於馬嵬道中、君臣相顧、日月無光。不翼日、父子堯舜、天下大和。

A ← B (該当する表現なし。参考…「長恨歌」に「旌旗無光日色薄」「君臣相顧盡霑衣」と。)

証例⑦…B 宮槐夏花、梧桐秋雨、春日遲遲兮恨深、冬夜長長兮怨急。自死之日、齋之月、莫不感皇容、悼宸衷。

A ← B 時移事去、樂盡悲來。每至春之日、冬之夜、池蓮夏開、宮槐秋落、……

証例⑧…B 自是南宮無歌舞之思、求諸夢而精魂不來、求諸神而致誠莫感。

A ← B 求之夢魂、杳不能得。

証例⑨…B 乃見仙女數人、相隨出戶、延客至玉堂。堂上褰九華帳、有一人冰雪姿、芙蓉冠、露綃帔、儼然如在姑

射山。

A 久之、而碧衣延入、且曰玉妃出。見一人冠金蓮、披紫綃、珮紅玉、曳鳳鳥、左右侍者七八人。

以上にあげた九例は、B『麗情集』本が概ね四字句を頻用する生硬な文体であり、一方のA『白氏文集』本は、同じく四字句を基調とはするものの、B本に較べて文意が明らかにすつきりし、表現が簡素化されている。

(ロ) 次に、A・B両本に引かれた諺語・箴語の問題である。

B『麗情集』本には、楊貴妃の馬嵬での惨殺の場面に、

叔向母云、其美必甚惡。李延年歌曰、傾國復傾城。此之謂也。

とあるが、A『白氏文集』本では削除されている。また、B本に、一連の故事の教訓を述べて、

嘻、女徳、無極者也。死生、大別者也。故聖人節其慾、制其情、防人之亂者也。生感其志、死蕩其情、又如之何？

とある部分は、表現と位置は異なるものの、A本に、

意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂於將來者也。

とある部分に相当する。一方、楊貴妃の榮華を述べて、A本には

故當時謠詠有云、生女勿悲酸、生男勿喜歡。又曰、男不封侯女作妃、看女却爲門上楣。

とあるが、B本には無い。(A本のこの部分は「長恨歌」の「遂令天下父母心、不重生男重生女」に相当する。)

ここに挙げた諺語や箴語に就いても、B本ではややくだい表現を、A本ではかなりすつきりと簡明に表現する。

(ハ) 「伝」の識語の問題

最後に、「歌・伝」成立の経緯を記した「識語」部分の表現が、A・B両本で大きく相違する。即ち、

A 元和元年冬十二月、太原白樂天自校書郎尉于整屋。鴻與瑯琊王質夫家於是邑。暇日相攜遊仙遊寺、話及此事、相與感歎。質夫舉酒於樂天前曰、「夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消没、不聞於世。樂天深於詩、多於情者也。試爲歌之、如何？」樂天因爲「長恨歌」。(略)歌既成、使鴻傳焉。世所不聞者、予非開元遺

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷(上)(竹村)

民、不得知。世所知者、有玄宗本紀在。今但傳「長恨歌」云爾。

B 元和元年冬十二月、太原白居易尉於整屋。予與瑯琊王質夫家仙遊谷、因暇日攜手入山。質夫於道中語及於是。白樂天、深於思者也、有出世之才、以爲往事多情而感人也深、故爲「長恨詞」以歌之、使鴻傳焉。世所隱者、鴻非史官、不知。所知者、有玄宗內傳今在。予所據、王質夫說之爾。

ここにあげたA・B二本の識語の異同からも、B本に較べてA本は文意が一段と分り易く潤色されている事がわかる。特にB本に「白樂天、深於思者也、有出世之才、以爲往事多情而感人也深」とある部分が、A本では「質夫舉酒於樂天前曰、夫希代之事、非遇出世之才潤色之、則與時消没、不聞於世。樂天深於詩、多於情者也。試爲歌之、如何？」とある部分などは、明らかにA本の方が場面が具体的であり、物語風で分り易い。また、B本の最末尾に記録する「予（陳鴻）所據、王質夫說之爾」という表現は、陳鴻が拠った楊貴妃故事の出所を明示したものが、A本では削除される。

今、(イ) (ロ) (ハ) に挙げた各様の表現の違いから、A本とB本の成立に関して、敢て一つの仮説を立てる事が可能である様に筆者は思う。それは、陳寅恪も推測する如く、B本即ち『文苑榮華』に附載する『麗情集』系統本が陳鴻の「長恨歌伝」原文に近いものであって、A本即ち『文苑榮華』正文及び『白氏文集』附載本は白居易自身の修改を経た改定本ではないかという事である。『白氏文集』卷十二に附載する陳鴻「長恨歌伝」は、どうやら『白氏文集』成立の当初から附載されていたとおぼしい。また上記の「歌」「伝」成立の経緯からすれば、白居易が陳鴻原作の「長恨歌伝」を逆に参考にし、必要な部分に手を入れて、文意を整え、『白氏文集』附載の「長恨歌伝」を完成させた過程も十分に想定し得る。A本B本ともに、「歌」が出来上がった後に陳鴻の「伝」が出来た事を述べるが、最初から一字も変更しない完全な最終定稿が完成したとは考えられない。むしろ、陳鴻の「伝」文自体も含め、白居易が何度も推敲を重ねる過程を通じて、白居易の「長恨歌」及び『白氏文集』附載の陳鴻「長恨歌伝」（A本）が最終的に完成したと考える方が、より妥当であるだろう。即ち、A本の末尾に述べる「今但伝長恨歌云爾」とは、実際上は白居易自身の「長恨歌」の伝疏に外ならないと筆者は考えるのである。

以上の推測から、もし仮に「歌」「伝」がこの様な経緯を経て成立したとすれば、『白氏文集』附載の陳鴻「長

恨歌伝」は、取りも直さず、陳鴻原作・白居易改作、つまりは白居易自身の作品であると言う事ができる。そしてその「長恨歌伝」に於ては、楊貴妃礼賛を基調とする「長恨歌」とは違って、「才智明慧、善巧便佞、先意希旨、有不可形容者」「欲懲尤物、窒亂階、垂於將來者也」という表現からも明確に見て取れる通り、正当な士大夫としての、傾国の美人、楊貴妃に対する批判の筆調が濃厚であった。筆者は、この事からも、白居易が、楊貴妃礼賛を主とした「長恨歌」と、楊貴妃批判をにじませた「長恨歌伝」とをワンセットにして『白氏文集』卷十二中に併録し、読者が「歌」「伝」の両作品を併せ読むことを意図したのではないかと推測する者である。

四

中晩唐期における楊貴妃故事を詠んだ作品の特徴は、過ぎ去りし盛唐の栄華の回顧と、それを促す眼前の関連事跡の衰落、及びそれらを包括する楊貴妃故事の物語化にあると筆者は考える。この特徴を典型的に示す作品例として、元稹「行宮」詩をあげる。

寥落古行宮 宮花寂寞紅 寥落せり 古行宮 宮花 寂寞として紅し

白頭宮女在 閑坐說玄宗 白頭の宮女在りて 閑坐して 玄宗を説く

僅か二十字の小品ながら、玄宗ゆかりの行宮の零落した様子や、曾て玄宗に侍り、今は曾ての栄華の語り部として余生を生きる老宮女の存在が醸し出すこの詩の詩境は、まさしく餘韻纏繞として尽きない。宋・洪邁『容齋隨筆』卷二には、「語少意足、有無窮之味」と激賞する。

さて、ここに描かれた「天寶の遺民」としての「白頭の宮女」の存在、及びその老宮女の語りにも耳を傾けている作者の構図こそが、実は中晩唐期の楊貴妃関連作品の一つの特徴である。即ち、

白頭病叟淚且言（白居易「江南遇天寶樂叟」） 白頭垂淚話梨園（白居易「梨園弟子」）

宮邊老人爲予語（元稹「連昌宮詞」）

等々の作品に登場する老人は、いずれも天寶の繁栄を物語る生き証人として、中唐の詩人元稹・白居易の面前に於

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷（上）（竹村）

て、自らが体験した盛唐を切々と物語っているのである。これを杜甫の「哀江頭」詩における「少陵野老吞聲哭」、また「江南逢李龜年」詩での「落花時節又逢君」とある動作の主体が作者そのものである事と比較してみると、盛唐と中唐の時代の推移が歴然とするであろう。盛唐の盛時を語る生き証人は、更に晩唐・宋代の作品にも特徴的に出現する。即ち、鄭嶼「津陽門詩」に於て華清宮の故事を語る旅宿の主人は「主翁年且艾、自言世事明皇」であり、宋・張翥「驪山記」にも明皇に仕えた遠祖の故事を語る九十三歳の老人が登場する。

また一方、中晩唐期に於ては、既に白髪の人となつた天宝の遺民と同時に、當時を物語る遺跡も既に昔日の面影は無く、衰落するにまかせていた。この事は、特に華清宮を詠んだ詩篇に於て顕著である。即ち、杜牧「華清宮三十韻」詩に

碧簷斜送日 殷葉半凋霜 迸水傾瑤砌 疎風罅玉房

塵埃羯鼓索 片段荔枝筐 鳥啄摧寒木 蝸涎蠹畫梁

とあり、張祐の「華清宮和杜舍人」詩に、

雀卵遺雕楹 蟲絲罨畫梁 紫苔侵壁潤 紅樹閉門芳

とあるのは、晩唐期における華清宮の零落した実写とおぼしい。更に、繰り返すが、元稹の「連昌宮詞」に、

荆榛櫛比塞池塘 狐兔驕癡綠樹木 舞榭欲傾基尚在 文窗窈窕紗猶綠

塵埋粉壁舊花鈿 烏啄風箏碎珠玉 上皇偏愛臨砌花 依然御榻臨階斜

蛇出燕巢盤鬪棋 菌生香案正當衙

とあり、また、鄭嶼「津陽門詩」に

雪衣女朱玉籠在 長生鹿瘦銅牌垂 象牀塵凝毳氍毹 畫檐蟲網網頰梨碑

とあるのも、中晩唐期における華清宮の零落ぶりを歌って真に迫る現実的表現である。

こうして、中晩唐期においては、盛唐の當時を物語る「天宝の遺民」も漸く年老い、且つ華清宮を始めとして當時繁栄の限りを尽くした遺跡も見る影も無く衰落していた事が推察できる。それでは、中晩唐期の詩人は、その開元天宝の盛唐時代の象徴である楊貴妃に対してどの様な考えを持っていたのであろうか。

前章において、同時代人としての李白・杜甫の楊貴妃観について見たが、特に杜甫については、諫官左拾遺時に撰した「北征」詩において、^レ国を傾けた^レ楊貴妃について批判敵しいものがあつた。実は中唐の白居易についても、諫官左拾遺時に撰した『新樂府』中に収録する「李夫人」詩に於て、手敵しい楊貴妃（玄宗）批判がある。

又不見泰陵一掬淚 又見ずや 泰陵一掬の淚

馬嵬坡下念楊妃 馬嵬坡の下 楊妃を念ふ

縱令妍姿艷質化爲土 縱令^{たと}ひ 妍姿・艷質 化して土と為らしむるも

此恨長在無銷期 此の恨み 長に在りて 銷^きゆる期^ま無し

生亦惑 死亦惑 生きて亦た惑ひ 死して亦た惑ふ

尤物惑人忘不得 尤物は人を惑はし 忘れ得ず

人非木石皆有情 人は木石に非ざれば 皆情有り

不如不遇傾城色 如かず 傾城の色に遇はざらん

白居易はここで、「嬖惑に鑑みる也」として、女色に感つて国を傾けた天子を戒める。実は白居易がここに述べる「尤物惑人忘不得 人非木石皆有情 不如不遇傾城色」という表現は、親友元稹の「鶯鶯伝」の末尾に、

天之所命尤物也、不妖其身、必妖於人。予之徳不足以勝妖孽、是用忍情。

と述べるのに、甚だ似通つている。所詮男側の身勝手な言い草であるのだが、白居易の尤物たる楊貴妃に対する士大夫としての正当な観念がこの新樂府「李夫人」に現れていると見る事ができるのであろう。前章において筆者は、『白氏文集』巻十二に附載する陳鴻「長恨歌伝」が、白居易自身の手によつて推敲された可能性について述べたが、その末尾に「意者不但感其事、亦欲懲尤物、窒亂階、垂於將來者也」と述べるのも、実は白居易の考えを自らの手によつて表明したものと考えられるのである。（この部分の『麗情集』異本の表現は異なっている。）

また、晚唐李商隱の「華清宮」詩に、次の様に述べるのも、屈折した表現ながら、独特の楊貴妃批判が窺える。

華清恩幸古無倫 華清の恩幸 古に倫無きも

猶恐蛾眉不勝人 猶ほ恐る 蛾眉（注：楊貴妃）人に勝らざるを

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷（上）（竹村）

未免被他褒女笑 未だ免れず 褒女の笑ひを被他かうむ

只教天子暫蒙塵 只だ天子をして暫く蒙塵せしむるを

李商隱はここで、驪山ゆかりの周の滅亡を招いた褒姒を引き合いに出し、玄宗の蒙塵の原因となった楊貴妃の「不勝人」(人でなし)ぶりを痛切に批判する。戸崎論文も「妖気を持つ危険な女である」と述べているが、中晩唐のみならず、その後の中国における「傾国の美女」楊貴妃への忌憚ない批判は、実に士大夫としての正当な主張であったと言えるであろう。してみれば、楊貴妃のロマンスを突出して描いたかに見える白居易「長恨歌」は、その後における楊貴妃像の祖型として中国内外を問わず甚大な影響があつたが、当初においては、必ずしも一般的ではない異例の楊貴妃像であつたと言ふことができる。

以上を要するに、中晩唐期に於て、盛唐の繁栄と没落の象徴たる楊貴妃は、一方で「傾国の悪女」としての批判は有りながら、既に「絶世の美女」伝説が成立し、流行し始めていた事が判明する。そして、その「美女」説の典型となつた作品が白居易の「長恨歌」であり、それを成立させた要因としては、楊貴妃没後五十年を数えて、楊貴妃故事が伝説として展開し始めた中唐、更には晩唐の時代背景が考えられるであろう。

五

盛唐の繁栄と衰落を象徴的に物語るものとして、その生前から既に種々の伝説に色濃く包まれていた楊貴妃故事は、やがて晩唐・五代を経て、所謂「所伝聞」の時代に入ると、自由な想像による勝手な文飾が更に輪をかけて蔓延する様になる。我々は主に宋以後に記録されて伝存する記事によつて、この時期における楊貴妃像の変遷の一端を窺ふ事ができる。ここでは、新旧唐書・資治通鑑・太真外伝等の史実や小説記録類を参考にして、主に楊貴妃の出自・初期の描写を手掛かりにしつつ、所謂正史記録中に如何に文学的修飾に富む野史小説の記事が混入しているかについて検証してみる事にする。

まず「太真外伝」に楊貴妃の出自を「弘農華陰人」とするのは全くの附会である。弘農楊氏といえは当世の名族

であり、加えて玄宗の玄獻皇后楊氏が真正正銘の「華州華陰^{〔1〕}」であるところなどから混同や附会を招いたのであろうか。伝えられる三姉妹や楊国忠の粗野な言動からも、楊氏一族が名族の出身だとはとても思われない。

次に、楊貴妃の貴妃以前の身分を寿王妃とするのは、『新唐書』のみであり、他の記録類はいずれも「寿王府出身」とは言っても、寿王妃とは明言していない事も、些細で且つ大きな差違である。『太真外伝』でさえ、この部分は「使高力士取楊氏女於壽邸」と述べるのみである。後世、定説となった感のある楊貴妃寿王妃出身説は、実は『新唐書』以来の誤伝であるとする姜龍昭氏^{〔16〕}説に、筆者も基本的に同意する。

そして最後に、楊貴妃の最期の描写について検討する。一連の楊貴妃故事の中で、馬嵬での最期の描写は最も関心を惹く話柄の一つである。その反映として、以下に羅列する如く、その描写は千差万別である。

- 血汚遊魂歸不得（杜甫「哀江頭」）
 - 宛轉蛾眉馬前死 翠翹金雀玉搔頭 君王掩面救不得 迴看血淚相和流（白居易「長恨歌」）
 - 貴人飲金屑 倏忽舜英暮（劉禹錫「馬嵬行」）
 - 太真血染馬蹄盡（李益「馬嵬二首」其二）
 - 長眉鬢髮作凝血（鄭嶼「津陽門詩」）
 - 喧呼馬嵬血 零落羽林槍（杜牧「華清宮三十韻」）
 - 雪（一作血）埋妃子貌（張祜「華清宮和杜舍人」）
 - 四面之霜蹄踐入（黃滔「明皇迴駕經馬嵬賦」）
 - 「踐楊妃」（王伯成「天寶遺事諸宮調」）
 - 萬馬蹄邊妃子亡（王伯成「天寶遺事諸宮調」）
- 以上には、詩賦作品における楊貴妃最期の描写例を掲げたが、劉禹錫詩例が服毒死とするのを除いて、いずれも従来散文等に於て伝えられて来た縊死などではなく、鮮血にまみれた惨死であった事を想像させる描写である。
- 一方、文章表現での楊貴妃最期の描写は次の様である。
- 遂縊死於佛室。（『舊唐書』卷五一）

「長恨歌」から「長生殿」に至る楊貴妃故事の変遷（上）（竹村）

○縊路祠下。(『新唐書』卷七六)

○上乃命力士引貴妃於佛堂縊殺之。(『資治通鑑』卷二一八)

○遂縊於佛室。(姚汝能『安祿山事迹』卷下)

○倉皇展轉、竟就死於尺組之下。(陳鴻「長恨歌伝」、白氏文集本)

○回眸血下、墜金鈿翠羽於地。(陳鴻「長恨歌伝」、麗情集本)

○力士遂縊於佛堂前之梨樹下。(樂史『太真外伝』卷下)

○左右以帛縊之、陳其尸於寺門。乃解其帛、俄而氣復來、其喘綿綿、遽用帛縊之、乃絶。(闕名『玄宗遺録』)先にあげた詩表現に比べれば、これらの文章表現は、この前後の場面描写を考慮すべきとはいえず、要するに楊貴妃縊死説を敷衍するものであり、先の詩篇作品における血まみれの惨殺表現とは異なる。『新・旧唐書』『資治通鑑』等の歴史書の記述も基本的には概ね楊貴妃馬嵬惨殺説の立場に立つ。さて、ここで問題とすべきは、一体誰が楊貴妃の最期の現場に直接に立ち会い、信頼し得る記録を伝え得たかという記事の信憑性の問題である。例えば『資治通鑑』卷二一八では、次の様に楊貴妃の最期の場面を活写する。

軍士圍驛、上聞喧譁、問外何事、左右以國忠反對。上杖屨出驛門、慰勞軍士、令收隊、軍士不應。上使高力士問之、玄禮對曰、「國忠謀反、貴妃不宜供奉、願陛下割恩正法。」上曰、「朕當自處之。」入門、倚杖傾首而立。久之、京兆司錄韋諤前言曰、「今衆怒難犯、安危在晷刻、願陛下速決。」因叩頭流血。上曰、「貴妃常居深宮、安知國忠反謀？」高力士曰、「貴妃誠無罪、然將士已殺國忠、而貴妃在陛下左右、豈敢自安。願陛下審思之、將士安則陛下安矣。」上乃命力士引貴妃於佛堂、縊殺之。

実にリアルな楊貴妃最期の場面であるが、一体誰がその現場をこの様にリアルに目撃し、且つ報告して記録に残したものであろうか。否、むしろ、これは小説的修飾が主体となっているものであり、史実表現というよりは、野史に依拠した小説表現がここに「史実」として記録されているものと筆者は考える。

以上にあげた諸例からも、楊貴妃の最期描写については、実のところ、正統な歴史書の記述においてさえも、雑多な小説的虚飾表現が分ち難く混入している事が判然とする。恐らく記録者の誰もが楊貴妃の最期に自ら立会った

ことは無く、従つてその記録は伝聞推測（の祖述）の域を出るものではなかつたであらう。詩文・小説表現ならば大いなる想像が許容されるのだが、歴史記録に於いても、その詩文・小説を史料として採録する限りにおいて、小説的表現の混入は不可避であつた。しかも、その歴史書を繙く後世の読者は、これらの歴史記録を等し並みに「真実」のものとして、更に独自の想像を駆使して、それぞれの楊貴妃像を創作してゆくのである。

六

以上、楊貴妃の同時代人たる李白・杜甫の詩篇を始めとして、白居易・陳鴻を含む中晩唐の関連作品、更には『新・旧唐書』『資治通鑑』等の歴史書における楊貴妃故事とその変遷について見て来た。ここでは、まとめに代え、楊貴妃故事の変遷について、主に詩・小説・散文等に係る文体の変遷の観点から捉え直してみたい。

まず、同時代人たる李白、杜甫の楊貴妃への言及は詩作品として伝えられる。この中、李白の「清平調詞」は如何にも李白詩らしく夢幻的な詩篇であるが、露骨な楊貴妃批判はそこには見られない。父子に交わつた卑賤出身の楊貴妃を侮辱したものだという批判は、あくまで別人の解釈である。『詩仙』たる李白詩はともかく、『詩聖』杜甫の『詩史』作品となると様相は異なり、杜甫の楊貴妃観がかなり鮮明に記録される。「麗人行」詩で楊貴妃一族の豪奢を見物する杜甫は、しかし責任ある立場にはなく、無名の大衆の一人であつただろうと思われる。楊貴妃惨殺の翌年に詠まれた「哀江頭」詩では、天寶の盛時を追憶するが、楊貴妃への一方的な同情は詠み込まれない。そして杜甫の楊貴妃観が明確に表明されるのは、雄篇「北征」詩に於てである。「姦臣竟に菹醢にせられ、同惡随つて蕩析せらる。聞かず夏殷の衰へしとき、中に自ら褒姒を誅せしを」とは、まさしく肅宗朝の諫官左拾遺の任にあつた杜甫の、国を治むべき士大夫としての見識を示した発言と受け取れる。この他、「赴奉先縣詠懷五百字」詩にも、丁度安祿山乱勃発時に、玄宗と楊貴妃の宿泊する驪山華清宮を過つた杜甫が眼前にした社会矛盾が赤裸々に描かれている。ここに引用した「北征」「赴奉先縣詠懷五百字」詩は、いずれも七百字、五百字に上る雄篇であり、杜甫の全詩作の中でも最も情熱を込めた代表的な詩篇である。その両篇に於て、いずれも楊貴妃故事が詠み込まれてい

「長恨歌」から『長生殿』に至る楊貴妃故事の変遷（上）（竹村）

る事實は注目される。この事は、つまり、盛唐の繁栄の中に生き、安祿山乱の勃発を眼の当りにした無名の詩人杜甫にとつて、玄宗の愛妃たる楊貴妃が文字通り繁栄と没落の象徴として投影されていた事を物語る。杜甫自らは盛唐の繁栄の余沢に与つて出世する事は竟に無かつたが、後世「詩史」の評価が与えられた詩人の敵しい楊貴妃観は、同時代人としての楊貴妃像の特質を典型的に表明していると考えられる。

次に、中唐の白居易の時代になると、楊貴妃はもはや伝説上の存在となる。「長恨歌」「長恨歌伝」が楊貴妃没後五十年に構想されたのは何より象徴的である。白居易は自ら左拾遺在任時に詠んだ『新樂府』『李夫人』詩において、楊貴妃批判を展開するが、これは杜甫と同じく詩人としての正當な見識を示したものと見てよい。ここに「長恨歌」「長恨歌伝」に絡んで注目すべき事は、唐代伝奇小説との関連である。即ち、沈既濟「枕中記」・同「任氏伝」・許堯佐「柳氏伝」・白行簡「李娃伝」・陳鴻「東城老父伝」等を読めば分る様に、唐代伝奇小説の多くが、既に過ぎ去つた盛唐への羨慕を文意に含んでいる。「楊氏伝」とも名づくべき「長恨歌伝」も例外では無いばかりか、その代表作品とも目し得るのである。第三章に於て考察した如く、『白氏文集』卷十二に附載する陳鴻の「長恨歌伝」は、その実、白居易の推蔽が加えられていると見るべきである。

さて、「長恨歌」における楊貴妃像は、「長恨歌伝」がより鮮明に楊貴妃批判を展開するのに比べて、むしろ濃厚なロマンス性に富むように筆者は考える。「長恨歌」の主題が何であるかは従来論争喧しいテーマであるが、ここで、楊貴妃故事が八四〇字の長篇七言古詩に物語風にまとめられている「長恨歌」の文体の側面も考慮されるべきであろう。即ち、白居易「長恨歌」(八四〇字)を始め、元稹「連昌宮詞」(六三〇字)・鄭嵎「津陽門詩」(一四〇〇字)・杜牧「華清宮三十韻」(一三〇〇字)・張祜「華清宮和杜舍人」(三〇〇字)・温庭筠「過華清宮二十二韻」(二二〇字)など、中晩唐に於ける楊貴妃故事を詠んだ代表的な詩篇の多くが、物語的色彩を強めた長篇叙事詩の体裁を取るのである。この事からすれば、唐代伝奇中の主要作品である「長恨歌伝」に、白居易「長恨歌」を附載するのは、逆に甚だ意味ある措置である。今ここで、唐代伝奇と楊貴妃故事との関係について十分に述べる紙幅は残されていないが、要するに、楊貴妃故事が中晩唐の詩人間において恰好の詩材として明確に認識されて来た事は否めないであろう。

そして最後に、これらの文人の楊貴妃故事への関心は、詩ばかりでなく、小説・散文等に於ても様々の記事を残した。既に伝聞の時代において作られた楊貴妃故事は種々の尾鱗が付いて喧伝されたであろうが、その多くは或いは既に散逸したものと思われる。『新・旧唐書』『資治通鑑』等の史書を見ても、楊貴妃故事のかなりの部分が当時の所謂『野史』小説の類から採録されている事は驚くばかりである。その中で、史官たる宋・樂史の『太真外伝』は、雑多な楊貴妃故事を手際よくまとめて説物として実におもしろく、多くの読者を魅了した。この後に作られた楊貴妃関連作品は、基本的には「長恨歌」「長恨歌伝」に併せ、この『太真外伝』に記録された楊貴妃故事を素材として修飾されたと言っても過言ではない。

こうして、中晩唐から五代（或いは宋代）までの楊貴妃故事は、伝聞とは言え、楊貴妃の時代の息吹をかなり直接的に継承して来たと言える。これに対し、宋代を経て次の元・明・清代における楊貴妃故事は、むしろ従来の伝聞を継承するとは言え、既に当時から半世紀以上も隔たり、盛唐や楊貴妃への関心も中晩唐の様に直接的ではなかった。次稿（下）に検討する元曲『梧桐雨』、更には清曲『長生殿』は、こうして楊貴妃故事がほぼ完全に伝承の過程に入った時代に、純粹に文学作品として醸成されてゆくのである。

註

- (1) 楊貴妃が実は馬嵬で危うく難を逃れ、後に日本に渡ったという風聞があり、山口県油谷町に「楊貴妃墓」も実在する。これは楊貴妃が日本でも痛く好まれた証例の一つであるが、中国・日本双方の資料からも確たる証拠は見つからず、また当時の情況からしても、この風聞の信憑性は疑わしい。
- (2) 楊貴妃が殺された馬嵬と、「長恨歌・伝」が構想された仙遊寺とは、渭水を挟んで約二〇kmを隔てる。
- (3) 李白のこの故事について、清平調詞と共に、韋叡の偽作とする呉企明氏「李白《清平調》詞三首辨偽」（『文学遺産』一九八〇年第三期）もあるが、本稿では従来の定説に拠って立論した。
- (4) また樂史「李翰林別集序」。
- (5) 杜甫と楊貴妃について、吉川幸次郎『杜甫私記』所収「金蝦蟆」「崔翁高齋」「天宝遺事」「先帝貴妃」（以上『全「長恨歌」から「長生殿」に至る楊貴妃故事の変遷（上）』（竹村）

- 集」十二)、『杜甫詩注』一所収「哀江頭」「麗人行」詩注等を参照。
- (6) 戸崎哲彦氏「同時代人の見た楊貴妃——李白・杜甫の詩歌における比擬表現を中心にして——」(京都大学『中国文学報』四三、一九九一年)。なお、楊貴妃の「玉環」「太真」という字号についても、西王母や上元夫人の名字と同された嫌いがある旨を、九大外人教師康保成氏から教示を受けた。『太平広記』巻二十所収「仙伝拾遺」、漢武内伝、「癸辛雜識」前集、「少室山房叢書」卷四三、「太平広記」卷五七所収「神仙伝」等の諸書を参照。
- (7) 取兩本傳文讀之、即覺通行本之文較佳於麗情本。頗疑麗情本爲陳氏原文、通行本乃經樂天所刪易。
- (8) 宋・闕名『五色線』所収の陳鴻「長恨歌伝」には、「貴妃賜浴華池、清瀾三尺、中洗明玉、政出水、力役不勝羅綺」とあり、B『麗情集』本に近い。
- (9) 魯迅「裨辺小綴」に、『麗情集』及び『京本大曲』本の「長恨歌伝」(B本)に就いて、「疑經張君房輩増改、以便觀覽、不足據。」とするのは從えない。本稿証例で検討した如く、張君房の増改本(B本)がA本より「觀覽に便」だとは思えないからである。
- (10) 拙稿「梅妃から見た『長生殿』の楊貴妃像」(『日本中国学会報』四七、一九九五年)参照。
- (11) 一に王建作とする。
- (12) 拙稿「白居易と天寶の遺民」(九州大学『文学研究』八四、一九八七年)参照。
- (13) 宋・劉斧『青瑣高議』前集卷六所収。
- (14) 拙稿「中晩唐における華清宮の零落」(九州大学『文学研究』八七、一九九〇年)参照。
- (15) 玄宗元獻皇后楊氏、華州華陰人(『新唐書』卷七六)。
- (16) 姜龍昭氏「考證楊貴妃二項新發見」(中国台湾輔仁大学『輔仁學誌』人文学部二十二期、一九九三年)。
- (17) 杜牧「樊川文集夾註」卷二所収「華清宮三十韻」附註。該書の考察については、許山秀樹氏「『樊川文集夾註』の成立と版本」(早稲田大学『中国文学研究』二十、一九九四年)に詳しい。
- (18) 拙稿「華清宮、和杜舍人」詩の作者は誰か(『九州中国学会報』三十、一九九二年)参照。